

ムーアと前提

中川 大 (Hajime Nakagawa)
北海道教育大学

ムーアのフェローシップ申請論文（‘The Metaphysical Basis of Ethics’ という表題の 1897 年と 1898 年に書かれた手稿 2 編）の存在は以前から知られていたが、ケンブリッジで手稿を閲覧しなければ読むことができなかった。遺族の承認が得られて、2011 年にはじめて出版され、一般にも近づきやすいテキストとなった。（*G.E. Moore: Early Philosophical Writings*, Edited by Thomas Baldwin and Consuelo Preti, 2011, Cambridge University Press.）

ムーアの初期の論文（‘Freedom’(1898) や ‘The Nature of Judgment’(1899)）のもととなったこれらの草稿は、発表された論文には採られなかった多くのテキストを含んでいる。それらの論文を読んだときにはさして印象に残らなかった用語や概念が、もとの原稿ではより重要な役割を果たしているように思われる場合もある。

この発表では、1898 年のフェローシップ申請論文に現われる「前提」(presuppose, presupposition) という概念に的をしぼる。この概念は、カントの議論を、いかなる経験命題にも前提される命題をアプリアリな命題として確立しようとするものとするムーアの理解に由来する。ムーア自身はこの前提という関係を明示的に定式化しなかったけれども、あえてそれを試みれば次のようになる。

事実がいかようになっていようとも、任意の経験命題に前提される命題 Q とは、つまりある経験命題 P について、 $P \rightarrow Q$ と $\neg P \rightarrow Q$ とが両方ともに成り立つような命題にはほかならない。ここで $A \rightarrow B$ と表わした関係が、論理的関係として B が A の必要条件であるような関係であれば、 $P \vee \neg P$ が排中律をなすことから、上の 2 命題にジレンマを適用することによって Q を確立できる。

しかし、このように定式化すれば、この論証が誤っているのは明らかに見える。 Q に相当する命題、つまり空間・時間やカテゴリーについての命題が真であることは、経験命題が真であること（ P が真であることや $\neg P$ が真であること）の通常の論理的意味での必要条件になってはいない。むしろ、 Q が真であることは、 P が真であったり偽であったりしうること（つまり、 $P \vee \neg P$ が真であること）の必要条件であるように思われる。そして、そのかぎりにおいて、ムーアがここで示唆している関係は、半世紀後にストローソンが同じ呼び名で呼んだ関係と相同的である。

ムーアは、1898 年手稿から「判断の本性」論文を構成するにあたって、「前提」概念が登場するテキストをほとんど採用しなかった。しかし、かれのカント批判が「単なる事実から必然性を引き出そうとする (presume to deduce a necessity from a mere fact)」企てへの論駁であったことに鑑みれば、かれが手稿において経験命題がある命題を必然化する前提という関係を示唆していたことには、英国新実在論の観念論論駁の性格を解明するための手掛かりを、なお求めうるように思われる。